

日本経済思想史 第7回

2004年度冬学期
武田晴人

⚠:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。

6. 労働観

1. 勤勉とは何か 時間の規律

● 勤勉な日本人？

● 豊かな国にだなんて、日本がそうなることを、われわれ（外国人記者）はとても想像できない。温暖な気候に恵まれているという自然条件が、唯一、日本に有利な点かもしれないが、怠惰で享楽を好むこの国の人々の性癖は、文明への進歩を妨げている。日本人は幸せな人種である。わずかなことで満足し、決して多くを成し遂げようとはしない。・・・西欧社会で確立され受け入れられている原理(principle)を移植しても、この国では、それが本来の意味を失って、ただ荒廃と退廃をもたらしているだけのようだ。(G.C.Allen A Short Economic History of Modern Japan, Fourth ed., Macmillan Press, 1981, p48)

外国人の写した明治初年の日本



果物売り この
の妻で戸毎に果物
売って廻つてわず
手にさげているか

おばあさんは小百姓
や菓子などの食物を
かにもうけをうる。
ごの中にあるのは柿

巡回靴直し 1859年（安政6年）外人
が来るまでは日本人は靴を知らなかつたの
で、この商売はまだ新しい職業である。チ
ョンマゲにフンドシー一本のはだかという
でたちは今日とても想像できない。

乞食 元は横浜で舟頭をしていたが、事
故で片方の眼を失明し、こじきとなつたと
いう。こもをかぶつたすさまじい風体。

開港場横浜の姿

――1880年代に来日したダニエル・ビジョン

● あわただしい舗道の人波、にこやかな笑顔、奥ゆかしくも体を折り曲げてする丁寧な挨拶。赤銅色に日焼けした筋骨たくましい車夫に曳かれて、音もなく飛ぶように走る人力車。ある者は頭髪を剃り落としたり、ある者はおかしな房に束ねたりした、まだら染めの着物の、なかば奇怪な、なかばかわいい子供たち。

● 上半身はだかの人夫らが、肩にかついだ長い竹竿の両端に重い荷物をつるし、したたる汗をぬぐおうともせず、韻律的なかけ声をかけて通り過ぎていく。街頭に重い瓦屋根の軒先をつらねた商店は、正面の戸を開け放ち、その軒先に吊されたさまざまな色模様の紙製の提燈が吹く風にゆれている。

(ヒュー・コータイツ『維新の港の英人たち』中須賀哲朗訳 中央公論社 1988年 p.146)



1880年代の横浜ージョージ・パーソン

● このぎらぎらしと太陽が照りつける、白熱の居留地にはまったくうんざりする。私はほこりっぽい街路がきらいだ。水分といえば、ひた走る人力車の車夫から飛び散った重い汗のしずくだけだ。それから、生気のない街道や、眠ったように活気のない商店も。荒涼とした大通りのわびしさ。借り手のつかぬ商店の建物にただよう虚ろな悲哀。人影のない海岸通りからの、燃えさかる太陽光線のなかで煮えたぎる群青の海の眺めは日々変わることはないのだ。

(ヒュー・コータイツ『維新の港の英人たち』中須賀哲朗訳 中央公論社 1988年 p.146-147)

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

『図説 日本の歴史 Vol.13』p.77 集英社 1976年

1880年代の横浜

——陸軍少佐サー・ヘンリー・ノリス

●横浜は陰気な、活気のない、気がめいるような町だ。街路の人通りは途絶え、埠頭に荷舟の影がなく、商店からは客足が遠のいた。そして最後に、景気のいい香港や日々発展する上海などに特徴的な、あの繁栄するときの熱心な姿が商館から消えてしまった。（ヒュー・コータイツ『維新の港の英人たち』中須賀哲朗訳 中央公論社 1988年 p.149）

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

苛酷な長時間労働の現実

● 夏になりますと、一反の畑に水桶五〇回から六〇回もやらねばならず、「嫁殺し」といわれた酷な仕事でした。一日何百回もの水汲みに、どの百姓も肩をはらしたものです。棉作りをしていた人々は、一般に「浜の目」と呼ばれ、他の米どころの人々に馬鹿にされたものです。棉のほかに芋か麦ぐらいしか出来ないこの地の人には、貧乏な人が多かったのです。

(吉村武夫『綿づくりの民俗史』 1982年 青蛙書房 p.90)

武田晴人著『集英社版 日本の歴史 (19)
／帝国主義と民本主義』p.253 集英社 1992年



著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

Haruhito Takeda

『図説日本の歴史 Vol.14』p.228 集英社 1976年

『図説日本の歴史 Vol.14』 p.83 集英社 1976年

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

『図説日本の歴史 Vol.14』 p.146 集英社 1976年

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

詩人・農民運動家 渋谷定輔

朝はまだ残月のあるうちから
晩は手元の見えるまでは野良で
身体の骨々がへし折れそうに働いてきて
夜は二里ほどもある停車場へ糞尿(ため)をひきにいくおれだ

(安田常雄『出会いの思想史 渋谷定輔論』勁草書房、1981年)



安田常雄
『出会いの思想史 渋谷定輔論』
勁草書房、1981年

Haruhito Takeda

綿打ち職人だった三田胎四郎

●「この店も寝る所は仕事場で忙しいときには午前三時に起こされたものです。六時が朝食でした。食事の時は、小僧は最後に坐り、一番早く立たねばならず、正坐したり、あぐらをかいて食べることなど出来ず、お膳の前で立て膝をついて食べました。飯はいくら食べてもよいのですが、お菜は無くなっている時が多かったものです。十八歳のとき最川方に戻り、ここで薄物職人として修業し、青梅綿専門の職人になりました」。

炭坑の女性 (安田常雄『出会いの思想史 渋谷定輔論』勁草書房、1981年 p.168)

● 坑内から上がって、まず預けた子供を迎えに走ります。その子を背中に十文字にかろうたまま売店で夕食の買い物、...家に帰ってから、魚の煮えるのも待てんごと、まずヤカンの中に徳利いれて、上がり酒の用意から先ですたい

(市原博『炭坑の労働社会史－日本の伝統的労働・社会秩序と管理』1997年 多賀出版 p.35-36)

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。



明治になって紡績業・製糸業が盛んになると
農村から女工となって出てゆく女性が多くな
った。

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
図を省略させていただきます。

60 筑豊切羽(きりは)での採炭作業——第1次大戦ころまでの坑内労働は多く2人組制で、先山(さきやま)が男、後山(あとやま)が女であった。ツルハシをふるのが男で運搬が女の仕事である。機械力のなかった炭坑では人力だけが頼りであり、納屋制度が行われていた。納屋頭(なやがしら)を頂点に、その下に人繰り、勘場などがおかれていた。納屋頭が会社から坑夫賃金の代理受取りをし、そこから貸金利子その他のピンはねをした。大正11年国会で納屋制度廃止の決議が行われたが、請負組が作業員を丸がえする関係はなおいろいろの形で存続した。

外国人の観察と日本人の実感との落差はなぜ生じたのか。

そもそも、日本人は「はたらく」ということをどう捉えていたのか。

●「労働」という言葉の意味、由来

●日本国語大辞典 / 日本大辞典刊行会編

●出版者東京：小学館出版年1972.12-1976.3 †

労働 身体を使って働くこと

●用例 養生訓 身体は日々少しづつ労働すべし。

久しく安坐すべからず。

西国立志伝 身体を労働するの益

島崎藤村「破戒」 丑松は斯の労働の光景をながめいてると、・・・

魏志一華陀伝 人体欲得労働(人体労働を得んと欲す)

●つまり、古い用例では、「労働」は「労働」と表記されている。少なくとも、熟語の「労働」は近代化の進んだ時代の産物。翻訳語として定着したもの。

●「労」という字の意味、用例

①苦労すること、ほねおり。

源氏物語 御らうの程はいくばくならぬに、

②その職を努めて功劳のあること、功績、年功

源氏物語 宮仕えのらうもなくてことしかかいし給へる・・・

③経験を積んで、巧みであること。熟練

④経験深く、万事に心が行き届いていること

⑤ねぎらうこと、いたわり

●「働く」という言葉と用例

①身体を動かす。動く。

宇津保 生きてはたらき給仏と言はれ給ふ加持参り給へば

②行動する。ふるまう。

中華若木詩抄 戦国の中でも、威を振て、悉皆王者の如くはたらく也。

③努力して事をする。精出して仕事する。労働する。

方丈記 つねにはたらくは、養生なるべし

④特に、戦場で活躍する。

⑤心などが揺れ動く。動揺する。

⑥精神がよく活動する。

⑦役に立つように用をする。

⑧他人のために努力する。……

- 「はたらきがある」 ことをうまく行う能力がある。
- 「はたらきがない」 ①効果がない。②仕事が出来ない。

「はたき」、「はたらく」は、人が動くことを表している言葉

- 転じて、その結果としての効果も含んだ言葉。

表記は、原則としてはひらがなで「働」は使われていない。

- 諸橋轍次「大漢和辞典」大修館書店出版年1984.4-1986.7によると、

- 「働」は「つとめる」「せいだす」「手腕」などの意味を表す字で、国字、つまり中国の文字ではなく、日本で作られた文字。

ただし、中国でも一時用いられた と記されている。

(中華大辞典 働 日本字、中国人は動と同じように読むと記されている)。

● それでは、「労働」という言葉は、いつ頃どのようにして使われるようになったのか。

● 再び大漢和辞典によると、

そもそも、「労」という字は、「勞」が正確な表記で、冠は火と屋の合字で、炎が屋を焼くことを意味し、そうした災禍のときに、これを防ぐために力を甚だしく使うことを意味する文字。

それゆえ、力を極める、転じてつとめる。つかれる。ねぎらうの意味に用いられると解説されている。

労愛、労慰、労役、労苦、労賜、労臣、労力

漢語では、「労働」 身体を動かす。はたらく。騒がす。動揺させるという意味・

これにたいして、日本語の「労働」は骨折ってはたらく。

- 近代にはいって、labourの訳語として、「労働」という熟語が使われるようになり、それは、「骨折ってはたらく」ことを意味するようになった、と考えるのが適切？
- 近世期まで、「労働」が主に用いられ、それは「はたらく」とこととほぼ同じような意味の言葉であったが、近代になって、「労働」と表記されるようになった頃から、その意味は、かなり限定されてきた。
- 従って、「日本人の労働観は？」という設問は、日本人が日々の生活のためにはたらくことをどのように捉えてきたのか、という設問に変える必要がある。
- ちなみに、「仕事」は「事をする」のいみで、「仕」は当て字。すること、しなくてはならないことなどの意味。

- 「労働」の「骨折り」という意味は、できれば避けたいことがらを仕方なくやっているという負のイメージにつながる。

- このような考えかたは、現代にも生きている。

労働はやむを得ないもの、余暇の時間を増加させることの方が望ましい……というように。

- しかし、もともと、生活のためにはたらくことに、マイナスのイメージを持っていたわけではない。

- 「勤勉」「勤励」などは「仕事や勉強に精を出してはげむことをいみし、これらの言葉は、続日本記などの文献にも見られる。

- ただし、近代に入ると「勤勉」「勤勉家」などはプラスのイメージの言葉として専ら用いられるようになった。

- そして、労働に勤勉な日本人 という表現になる。

勤勉さを説明する試み

●「欠落感」の充足か？——経済学者日高晋氏の説明

● 高度成長を引き起こしたもの、成功させたものの中心が、国民の勤勉さにあることに異論はあるまい。それは労働者、職員、経営者をも含めた勤勉さであった。世の中はいつもあわただしく、めまぐるしく動いてきた。人々はいつもあわただしく、めまぐるしく勤勉であった。勤勉という美德はいったい何なのであろうか。それはあるいは、人生をゆったりとのんびりと楽しむことのできる能力の欠如を意味しているのかもしれない。貧しいながら人生を楽しむ能力にめぐまれている民族があるが、こういう能力の欠如、欠陥民族ということこそ、日本経済の高度成長をもたらしたものではなかったのか。社会の伝統的な宗教性の希薄さのために、人々は欠落感、飢餓感に苦しめられ、それが人々をかりたてて勤勉にしているのであろう。

（日高晋『日本経済のトポス』青土社、1987年、p.230）

● 「収入を得るためにはやむをえず決められた時間だけきめられた仕事をする。時間がくればさっさと家に帰って会社のことはほとんど念頭におくことなく家庭を楽しむ。そういう従業員のあり方は商品経済としては当然のものであろうが、日本の会社でそういう態度を守り抜くにはよくよく精神力に恵まれていなくてはならない。ふつうは、会社の仕事に生きがいを感じることになってしまい、情熱と緊張を会社のために捧げることになってしまう」。

（日高普『日本経済のトポス』青土社、1987年、p.314）

● 「もし従業員が苛酷な労働を強制されているだけなら、かれにとって家庭は魂のやすらぎの場となるであろうが事實は違ふ。会社で働くことに生きがいを感じ、主体的に情熱と緊張を捧げてきた者にとって、家庭は寝るところにしかすぎない。・・・家庭がそれ以上の意味を持ってたちはだかつてきたらそれはかれの生きがいの充足にとって邪魔なものでしかないのである」ということになる。そのため、「家庭内でのコミュニケーションの不足などが生じ、あるいは教育問題や男女の雇用問題、公害問題に関する従業員の会社寄りの対応などの問題を生む」。

（日高普『日本経済のトポス』青土社、1987年、p.316-319）

労働の主人

- 労働はできれば、忌避すべきもの、それに割く時間を最小化して人生は楽しむべきだということが大前提になっているこの説明は、説得的なのか。
- それは、近代に訳語として定着した「労働」の意味に即してみるとある程度、状況を説明しているかに見えるが、それでは、なぜそうした「労働」という捉え方が定着したのか。
- あるいは、説明のように長く農耕社会であった日本では、そうした労働観のもとで、人々は嫌々ながら働いていたということなのか。

工場労働の特徴

- 明治から大正にかけての時代、工場や鉱山で働くことは、自分の社会的な評価を落とすことになるような人生の経路であった。
- 牛馬のようにこき使われる労働者は、社会の下層のなかで極貧の生活を余儀なくされ、生産的な活動を通して社会の発展に貢献しているにもかかわらず、その栄光はほとんどすべて企業者の上に輝き、労働者は対等の権利も社会的な評価も受けられなかった。
- ……第一次世界大戦のころ、労働運動の指導者たちが掲げた目標は労働者自らの修養・自己啓発を通して社会から「人格の承認」を得ることだった。人並みに扱って欲しいというのが彼らの切実な要求だった。
- 日本人が工場の労働に示したこのような反応は、おそらく「働くこと」に関して、工場の労働が、それまでとはまったく異質の要素を持ち込んだことに敏感に気がついていたからではないか。

- 伝統的な社会では、自作農民にしろ職人にしろ、彼らの労働の形態は、主人のいないものであった。
- 農民たちは、自然条件に左右され、絶えず災害の発生に気を配り、作物の成育状況や天候に応じた農作業を間断なくこなしていかなければならなかったが、それをどういう順序でいつやるのかの判断は彼自身の決断にかかっていた。
- **労働の主人は彼自身だったのである。**
- 生きていくために生活のほとんどの時間を使い、肉体をすり減らして働き続けなければならなかったけれども、それを決めるのは農民たち自身であった。

トマス・スミス『日本社会史における伝統と創造』

● トマス・スミス『日本社会史における伝統と創造』は、江戸時代の「農書」の記述を詳しく検討し、その結果として、百姓たちが農作業について、毎日、毎月、そして毎年、これを計画的な行うようにと繰り返し教えられていたことを明らかにした。計画を作るのは、百姓自身だった。

● 「一年中なすことわざを、初春の内に覚悟・工夫せざれば、極月に至て万事指詰り、難儀する。一ケ月中なすべき事、朔日に思案・工夫せねば、三十日になりて万ととのはず。……」

● その理由としての家の観念と農作業の複雑さ

①「其家を起したる先祖の田畠財宝にして預かりものなり。大切に所持し、子孫に伝ふべし」

②個々の家の耕地は小さく、分散しており一つとして同一の条件の箇所はなかったし、多数の作物を季節に応じて栽培するには、計画的な人の配置、作業順序の工夫が必要。

徳富蘆花『みみずのたわごと』

● 東京が大分攻め寄せて来た。・・・以前聞かなかった工場の汽笛なぞが、近来明け方の夢を驚かす様になった。村人も寝ては居られぬ。十年前の此村を識って居る人は、皆が稼ぎ様の猛烈になったに驚いて居る。政党騒ぎと賭博は昔から三多摩の名物であった。此頃では、選挙争に人死はなくなった。儂が越して来た当座は、まだ田圃向ふ雑木山に夜灯をとぼして賭博をやったりして居た。村の旧家の某が賭博に負けて所有地一切勧業銀行の抵当に入れたの、小農の某々が宅地までなくしたの、と云ふ噂をよく聞いた。然し此の数年来賭博風は吹き過ぎて、遊人と云ふ者も東京に往ったり、比較的堅気になったりして、今は村民一同真面目に稼いで居る。其筋の手入れが届くせいもあるが、**第一遊んで居られぬ程生活難が攻め寄せたのである。**

「労働の主人」という点では職人たちの日常も同じであった。

●彼らは出入りの顧客や馴染みの顧客の注文に依存していたが、注文の品をどう作るかは彼ら自身の裁量に委ねられていた。

●腕の良い植木職人は、顧客先に行って仕事をするとき、すぐには仕事にかからず、外見的にはのんびりとキセルをくゆらしながら庭木を眺めているという。それは仕事をさぼっているわけではない。彼は、どのように仕事を進めどのように庭木を剪定していけば、顧客の満足できるような仕事ができるかを考えているのだという。

●仕事を自分の決めた段取りで進めること、それが彼らのはたらきであった。

明治の初め、横須賀造船所の技師ヴェルニーの報告書

- 「日本人職工の欠勤率は一五・四％に及び、フランス国内の造船所の平均五％よりもはるかに高い」

(尾高煌之助『職人の世界・工場の世界』リブロポート、1993年 p.179)

横山源之助『日本の下層社会』(岩波文庫版 1985年 p.216)

- 鉄工場と町に散在する鍛冶屋とが比べられ、両者は似たような製品を作り出しているがその仕事の中味、質はまったく異なるものなので、もし工場の能率を改善しようとしたら、腕の良い鍛冶屋を雇ってきても見込みは薄く、工場の専門工として機械工を養成し、工場に適した熟練を植え付けるべきだと指摘されていた。

与えられた時間の規律

「決められた時間決められた仕事をする」こと

これが近代の勤勉さ、雇用者の視点からの意味

- 工場労働になると、その分業や協業の体系にそって労働者は、決められた時間、決められた仕事をやることを求められる。そこには仕事に関する働き手の裁量の余地は小さく、労働の主人は、経営者であり、資本家だということになる。
- こうして自主性を失っていくところに、近代の労働の特徴がある。それ故に忌避されるべきものとなったのではないか。

父の代から钣金職人として小規模な作業場を経営していた小野寅吉・芳雄のインタビュー記録

● 「昔の人はね、みんなとやっていててもお金のことでなく働いて、ほかの人と二人でやっていたらその人よりも早くよいものができたって、そういうのを誇りにしていたのね」と、彼らの仕事が、金ではなく腕を競うところに誇りをかけていたことが明確に語られている。そうした考え方からすると、**工場での労働では、「時間さえくれば金になるんだから。昼間がんばってしまえば昼間の給料だけなんだけれど、ぶらぶらして、夜まで仕事を残せば残業になって二割五分増し」となるなど、時間を基準に労働の成果が測られる。その結果は、彼らには納得のいかない状態だった。**

インタビュー記録 つづき

● 一生懸命働いて疲れるでしょ。疲れるから休む。また一方には、ぶらぶら適当にされていて、しかし全然休まないで通していくという人たちがいる。そうすると、給料の時にはぶらぶらしていた人の方が全然多くなっちゃってね。いつときにぐうんと働いたり、いくら生産をあげたりしても、負けですわ。結局、あとで出勤簿調べて統計とるでしょ。それをもとにして昇給を決めたりするから、適当に遊んで、しかし休まないっていう人が給料高くなるわけですよ。それを見破る人がいないんです。

(森清『町工場』朝日新聞社、1981年、p.63～64)

● 「お金を稼ごうっていうより、いい仕事をしようってね。それが名人肌よね